

〈図書紹介〉 『境界を超える看護：倫理学へのアプローチ』 ヴェレナ・チューディン編
井部俊子監修、大東俊一監訳、松下晴彦、大東真理、原田裕子訳 エルゼビアジャパン
2006年

小林, 亜津子 / Kobayashi, Atsuko

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007949>

【図書紹介】

『境界を超える看護—倫理学へのアプローチ』

ヴェレナ・チューディン編 井部俊子監修、大東俊一監訳、松下晴彦、

大東真理、原田裕子訳 エルゼビアジャパン 二〇〇六年

小林 亜津子

本書は、倫理学への実に多彩なアプローチを試みた論考集である。編者のヴェレナ・チューディンはこう述べている。「看護実践はすべて倫理的な行為である……患者にとっては、どのような対応をされるかは大問題である」（本書六頁）。たとえば三つの仕事を抱え、同時にこなしている最中に患者に呼ばれ、「いったい私はこれからよくなるんでしょうかねえ…」と尋ねられたとき、これら四つの仕事にどのように優先順位をつけなければならないのか。後でお話を聞きますと言って、患者の苦しみを引き伸ばしたり、「もちろん、よくなります」とも」と答えて済ますことはできない状況かもしれない。

看護学生が倫理学を学ぶようになった八〇年代以降、看護師たちは医学倫理のテキストを使って、「医学」という言葉を「看護」に書き換えるだけであった。看護師は理論を詰め込んだ「看護を信頼しよう」としてない教材で教え、学んでいた」（本書四頁）。けれども「倫理学はたんなる抽象的な思考ではなく、看護者・患者関係は、テキスト上の単なる「ケース」ではない。倫理は抽象的な理論の領域を踏み越えて、「現実の、血が通った

ケース」に取り組みむときに初めて、根本的な問題を提起する」とができる」と編者はいう。

さらに看護実践を「倫理的」にするために、倫理学に対する複数の、とくに異文化によるアプローチを知ることが必要だと編者は主張する。「看護実践が素晴らしいものとなるのは、看護師が専門職としての経験と知識に基づいて、優れた決定を下すことができ、専門知識によって、その結果を判断できるときだけである。……それには看護実践についてじっくりと考えることが必要となる。その過程で、倫理学に対するさまざまなアプローチが現われ、その特色が示される。そうしたアプローチは省察を導き、実践・哲学・伝統・文化・ニーズにスポットをあて、現時点を超越し、さらにその先を視野に入れた議論や価値観の形成を促す」（本書六頁）。

「倫理的な考えと行動を深めていく」ため、本書では「フロネシス」やソクラテスの対話によって、看護実践が語られる。それにより読者は省察を促され、「自分自身を知ること」ができるだろう。「看護の定番から精選された」本書の多彩な倫理的アプローチに「真に耳を傾けると、そこに異なった表現による自分自身の声が聞こえてきて、あらためて自らの価値観を理解することができるのである」（本書七頁）。

原著 Verena Tschudin, *Approaches to Ethics: Nursing Beyond Boundaries*,

Butterworth-Heinemann Medical, Edinburgh, New York 2003.